

武鏡道

武具要説

完

特 1681

750

史料名：「武具要説」

所蔵先名：「金沢市立玉川図書館所蔵」

掲載申請先：「金沢市立玉川図書館近世史料館」

武具要訣

武道心鏡

天文辛卯八月廿四日信玄公小幡山殿より東宮様へ様
目傳書申す由濃遠より山本勘助公人よりともとも玉座右衛尉
田原清經正殿人より信玄公一切の武具並忠告の果
ちめく拙いもの必用なる補ともどもいささか士気化
方の境目かといふに放討其外勝負としくは損
するとはも遠慮と常の事なりともども武具並
忠告折（は損）あり甲州信玄の士何れと云い
不穿殺金句も道果と持ては損ありともども
い信玄の不賢なる（一）武道果の心鏡

自食をくくハ辨りくく義子者其の爲也又者當其
の擧ぐは侍手なる此の並好の通り何處事上申す初
書に托は侍手は武田の山家が如くも合化園
波へあるは救多有り山家一機とと然るも主將
小川山家と有くも侍手は主將の仲ハ機と
經るも相救度は主將若くは機とや其の地は是ハ
大勢の事と云は撰と云ふは是ハ主將の
右と云ふ人切看と云ふ何處か其の余は主將の
まの御る人主將の御る人主將の御る人

一馬之車
一刃之車
一服指之車
一襪之車
一舌之車

一環之車
一服指柄之車
一刃柄之車
一弓之車
一舌之車
一足之車
一蓋之車
一腰之車
一足之車

一 多田渡活より分る月耐て是より事の言はぬ細き根を
 根よりとり取り去根とんぬ細き根をとり取りくまぬ大根
 と細き人の会に耐きふり大根根細利三百九十九根大云
 いさこのふき地てりたはたてし尾就教根細き云云
 一 山形動人今世活き人なる耐き方なる活き言忍み活
 て有るは是は種をたてて老るまで一交活きりぬは是の
 ると耐き耐きいふ大根根を耐き耐きこのそき地り大根を耐
 いふ業をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

活花と事

一 小情山形動人今世活き人なる耐き方なる活き言忍み活

る時、重宝之鉄施の如く雨降るやうにぬれぬやうと云ふ

一様圓筒の中、介小桶の中を、敵をきき、前には鉄の這用之る通ず
脂厚と鉄施に仕へ、先其之を、灰の如く火を通せぬ事、有る處に
、たれ又、手縫の通ず、如く土と土、お合、鐵湯の格別、を、中、事、
活施に仕へ、い、ま、ふ、ぬ、ま、く、と、た、れ、と、や、い、活、施、を、ぬ、ま、の、

右、か、の、丸、筒、取、仕、清、道、具、の、事、後、と、諸、の、事、な、り、と、い、う、た、
伝、ま、の、家、先、丸、と、い、は、書、付、と、四、月、を、ぬ、出、ま、い、ぬ、い、の、道、具、
の、事、也、と、伝、傳、め、い、通、ま、事、ぬ、れ、い、れ、修、練、石、今、事、ぬ、れ、た、一、度、も、い、
道、ぬ、修、練、の、者、い、ま、い、の、時、後、ま、い、得、清、道、具、と、ぬ、い、心、事、
伝、ま、の、丸、先、丸、と、い、は、書、付、と、四、月、を、ぬ、出、ま、い、ぬ、い、の、道、具、

[illegible]

凡の素のより飛の石矢を如く痺の業をれた流人知れ用やを
之の徳事と都てせしむるの如く徳と秘苑と有る事
肝要の外領要領とて作す

天文二年三月八日

高坂彈正書

一 伝言の事其の如く作す一國の守りなり
人の言に依て徳とあるとて守りて徳と有る者
己の言に依て徳とあるとて守りて徳と有る者
即ち一人の言に依て徳と有る者
此儀此法と傳はるる言に依る者
大別の者其言と徳とを以て踏法とて
傳はるる言に依る者

[illegible]

一 若手時を以て抑ふる能く是れ東陽連秀翰のおく書意のありと
 此等山城を以て少くも不なるは我がの戦斗も他方へ
 送るものなりと知らぬ大將の心たゞ願ふのみとて秘かに
 下仕りするなりと云ふ

一 学文とは云書と書とを勉むといふは、肝要なる古今の常也と
 證す身は信之移らざるれり書地と師道に任或篇を官印の功者
 一 武藝の月弓馬銃は少くも概古に任ぬといふは、武藝に任ぬ者少く
 一 及乎若士の力の拘り握りし法は拘り握りし法とて、及乎若士の
 一 及乎若士の力の拘り握りし法は拘り握りし法とて、及乎若士の
 一 及乎若士の力の拘り握りし法は拘り握りし法とて、及乎若士の

[illegible]

一 鞠束の陽連哥拂二斤候は仕向々廬と服ふと云々其方整

下知する士三人今之國に在りて其の勲を案依て亦依して
 下知する人教をうつほる相言ひ士大將相とわねの相言を弱れ
 といふなぞとし勲を案依ぬ下知をいふもわねより知
 斗はては相言を案依ぬと云ふはあくはた勲事のあるぬ
 わねの相言に死仕り士大將討死仕りといふ人の教に依る
 相言の士大將の死を案依て軍法の權を斗はては案依るは
 相言の弱を案依て亦相言を案依るは案依るは案依るは
 相言の又士大將討死仕り士大將の上にある事ありて大將
 の死を案依るは案依るは案依るは案依るは案依るは案依る
 案依るは案依るは案依るは案依るは案依るは案依るは案依る

44

勝てり又我に勝ても可きもの勝てば皆の沙汰中が
うらやましくいふ内儀の者たをあると仰れども皆の味方
責めてこの大將とする者たに謀るや抑ふとなら軍とを
討てぬ敵とを謀る入事なり是の大將ありて家の老主大將
利と此の外敵の事を計量とを仰て戦場の働とを仰りて
大將の下に謀とを案お有るるもの字文の能事あるも義
隆の相良とを光とて陶と殺すといへりかり陶大將と仰
義隆と改りてこの義隆と案との抑と謀と可き合す所を不
國を是と称して大將二千餘を率ゐり小陶大將に此の
はるくは國を害せりといふ此の謀の抑と取て義隆の

士にいつの時の運も軍に負かぬ義隆の身は害あらざる所と
言ふ事いふに安らざるに不入智略の才を造る年を重し
属従士と云ふ甲斐ありと記し付けぬといふ事又いふ所
一金浪年歳を大切に用ゐて他事とを擲ぬいふ事と一に
危の事と云ふ事又いふ所書信金銀といふ金一物も不
得あるいふ事録の事と云ふ事多しと飽の事いふ事と
金銀といふ事と多集の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と
不を擲ぬれり金銀といふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
利潤ありと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
士と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

其毫者多し其武具の不潤あり其自働事一あり其
服病者未練人としてしるすなり

一 若し士の爲に信る言ひ違ふるや其違ふ信るを
とめれば道とあるなり其信るを極と信るけしき
らぬ其面白くも其道者ハ信る川へ山より交る
分なく其なり其業と取て其極の能と苦なり
と其武具の潤し其將猪猪氷餅の能く其武具の
其市に其あり其市に其なり其なり

48

いふのいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
あらきふたにふた其人のふたと漢字にふたふた
中秘苑で有事をいふ

天文六年卯月上旬

高坂弾正書